

中級日本語学習者の作文産出における第1言語使用の効果

—トピックの抽象度との関連から—

石橋 玲子

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

【問題と目的】第2言語(L2)の作文産出において学習者の第1言語(L1)を使用させることは、必ずしもL2の作文産出の干渉にならないことが報告されている(Kobayashi & Rinnert, 1994; 石橋, 1997, 1998, 1999)。石橋(1997, 1998)は、日本語学習者を対象に論説文の作文産出におけるL1使用の効果と日本語能力の熟達度との関連から検討し、日本語能力中級の学習者には、L1の明示的使用が作文の質及び量の両面で効果があることを明らかにした。石橋は、中級レベルでは、認知負担の大きいL2の作文産出にあって、L1はL2の熟達度の制約を補完する効果があると示唆している。しかし、課題の認知負担がL1使用の効果に関連するのかわかではない。そこで、本研究では、論説文のトピックの抽象度に注目して、抽象度の高い内容産出が必要と考えられるトピックの方が、具体的な内容産出を必要と考えられるトピックの作文より、L1を使用させる翻訳の効果があるのかどうか、中級の日本語能力の被験者の作文を再分析することによって検討した。

【方法】被験者：中国語をL1とする中級日本語学習者22名。手続き：4つのトピック(抽象的—男と女、大家族と小家族；具体的—私の国の食べ物と日本の食べ物、私の国の家と日本の家)から一つ選択して論説文を書く。第1週目は直接日本語で作文産出する。第2週目には、第1週目とは異なるトピックを選択して、中国語で産出

してから、日本語に直す。分析：直接作文22編(抽象的トピック3編、具体的トピック19編)と翻訳作文22編の(抽象的8編、具体的14編)計44編を分析する。作文の質は、内容(5項目)、構成(4項目)、言語形式(2項目)の11項目について5段階評定した。評価は、2名の日本語教師が別々に実施し、評定の不一致は2者の平均を得点とした。

【結果と考察】作文の質の評価得点を内容、構成、言語形式毎に合計し平均を算出した。合計点は比較のためパーセントに換算した。表1は直接日本語で産出した作文のトピックの抽象度別平均評価得点と標準偏差である。表1に示すように、作文の質のいずれにおいてもトピックの抽象度による作文間の得点に有意差は検出されなかった。一方、表2の中国語で産出してから日本語に直した翻訳作文では作文の内容、構成、言語形式全てにおいて、トピックが抽象的なほうが作文の平均評価点が有意に高いことが判明した。これは、中級レベルの被験者は、具体的なトピックより、抽象度の高い内容の産出を要求するトピックの論説文のほうがL1を明示的に使用させる効果があることを示唆している。本研究の結果は、中級の日本語能力の学習者には、認知負担の大きい作文産出課題では、L1使用が日本語能力の熟達度の制約を補完する効果があると示唆した石橋(1997, 1999)の考えを支持する結果となった。

表1 直接作文におけるトピックの抽象度別平均評価得点

	トピック		t 値
	抽象的 (N=3)	具体的 (N=19)	
内容	76.0 (6.0)	68.4 (10.1)	1.82 n. s.
構成	72.5 (6.6)	68.7 (10.5)	0.84 n. s.
言語形式	66.7 (7.6)	62.9 (8.4)	0.79 n. s.

()内はSD

表2 翻訳作文におけるトピックの抽象度別平均評価得点

	トピック		t 値
	抽象的 (N=8)	具体的 (N=14)	
内容	84.3 (7.3)	66.9 (11.3)	4.39 **
構成	81.6 (5.8)	66.3 (13.2)	3.75 **
言語形式	74.4 (5.0)	63.2 (8.7)	3.84 **

()内はSD

**p<.01